

立川飛行場戦前史 飛行場変遷概史



昭和 4 年夏以降の立川飛行場、東側の飛行第五連隊を望む（当時の絵葉書より）

今年（2012 年）の 5 月、立川飛行場は開設 90 周年を迎えた。それを記念して、戦前史（開設～太平洋戦争開戦）までを綴ったが、ここではその抜粋として飛行場変遷の概要を披露したい。

1. 飛行場前史

大正 10（1921）年 2 月、東京の近くに航空第五大隊を置くべく、その敷地選定が開始された。命令「陸訓第八号」に基づき作業を行った陸軍航空第五大隊敷地選定委員会は、6 月、結果を陸軍大臣に報告した。

選定された地名が、「東京府北多摩郡立川村字原市場西北部」、今の立川飛行場である。

■候補地と選定理由

候補地は立川を含めて 4 箇所であったが、すぐ近くに中央線という鉄路を持つ有利性、そして将来の拡張性と職員他の居住性から立川が選定されている。

以下に、その報告書の概要を示す。

航空第五大隊敷地選定案

判決

航空第五大隊敷地は、東京府立川付近

に選定するを要す。

理由

航空大隊は東京付近に設置するも、東京市との交通連絡容易ならざればその目的の大部を没却するは言を俟たず、これが顧慮を払うときは渡河地点並びに空中距離の関係上、勢い利根川以南、多摩川の以北にして、しかも西方を八王子山脈に至る点の地域に限定せられるべし。

同地域内において航空大隊敷地候補と認め得るべきものを探れば、概ね次の如し。

- 一、川越町南方
- 二、東京府小川付近
- 三、神奈川県上溝付近
- 四、東京府立川付近

以上の利害を判定するときは、設備のため多少の経費を要するも飛行のため支障なきと地域の広大なると将来要する拡張の余地を有する点、ならびに居住比較的容易なる点を顧慮し、立川を選定するを可とす。

なお、報告書は 4 候補地について、それぞれ次のように判断している。

一、川越付近

物資の供給ならびに職員生活のため川越市街を利用し、かつ東京との交通概して便利にして鉄路ならびに道路とも完全しあるも、飛行場敷地として選定し得るべき地域は広さ辛うじて三中隊の利用を許すに留まり、将来の拡張のためには、同候補地の西北端に沿う川越線鉄道ならびに南部部落若干を移転するを要すると、なおかつ、この移転を実行するも周囲の地形は局限せられるを以て、良好の飛行場と言うを能わず。

二. 小川付近

生活ならびに交通の状況は概して川越候補地に劣り、地域を限定せらるる状況は川越より更に甚だしきものと、候補地は既に東京都水道部の用地に編入せられある関係上、これを避けるを要するを以て、飛行場全般の形状は台形をなすに止む無きに至り、将来の使用に制限を受けるべし。

三. 上溝付近

同地は多摩川南方にして当初記述の要件に反するも、地域広大平坦更に拡張の余地充分にして、飛行場としては一見良好なる如きも、一般の交通及び居住の不便大にして永久的設備として遺憾の点あるのみならず、従来、操縦者の言う所によるも一般に気流良好ならざるを以て、適当ならず。

四. 立川付近

候補地は多少の起伏ありかつ森林を含有するを以て飛行場として設備のためには比較的経費を要するも、地域広大にして要すれば将来の拡張に当り周囲に制限を受くることなく実行し得ると、職員以下居住のためには中央線を利用し東京郊外ならびに八



格納庫の組立て風景。工事は広島森田組他が当たっている。(写真は、立川市のHPより)

王子より通勤容易なると、東京市との交通のため鉄道道路ともに欠点なきを持って、将来同隊の維持費を考えるとときは比較的良

候補地調書から、立川の抜粋を表 1-1 に示す。

■ 開場準備

立川の飛行場は、大正 11（1922）年 3 月に地鎮祭が行われ、8 月にはほぼ完成を見た。施設の建物も進んだ。

その主となる航空第五大隊は、大正 10 年 12 月に岐阜県各務ヶ原（かがみがはら）の

表 1-1 航空第五大隊地敷地候補地調書

地名	東京府北多摩郡立川村字原市場西北部
一般地形	・武蔵野町西端、中央線沿線立川駅北方に接する森林地ならびに畑地にして、東西ならびに南北に 1200～1300m、面積 45 万坪を求め得る ・概して南北を二分し、中央付近において高低二部分に分けることができる（高低差約 3m） ・北部は森林、南部は平坦なる畑地 ・当候補地は東方に主要道路あり、南方は鉄道に接し、西方に岩崎経営の養豚場がある関係上、北面のみにさらに拡張の余地充分にあり
設備	・敷地中央において段形をなし南北に高低差あるため、全体に地均費を要する ・南方敷地内にある電話線ならびに避病院、北部 1/3 に密生する森林はことごとく除去の要あり ・地価は、2 円 35 銭／坪くらい
飛行の難易	・各方面の風に対し、随意に飛行を実施し得、障害なし ・ただ、東北端に近く神社の森あるも樹高大ならず地幅小のため、飛行方向を選定すること困難ならず ・付近、補助着陸場として利用し得るもの、少なからず
交通	・鉄道は中央線を利用し得、東京と連絡容易 ・道路は良好にして、各方面に交通差し支えなし ・電話や電力等の引用困難ならず、電信は鉄道駅に委託し得る
居住生活物資調弁関係	・前掲鉄道を利用し、東京郊外を利用するかあるいは八王子付近を利用するを得 ・小中学校は、付近に完備しあり

航空第二大隊内に編成が開始され、飛行場完成（大正 11 年 8 月）とほぼ時を同じくして、飛行大隊に改称された。

大正 11（1922）年 11 月には岐阜県各務ヶ原から立川へ飛行第五大隊が移駐し、宮城警護の近衛師団隷下に置かれた。

大正 14 年 5 月、飛行第五大隊は飛行第五連隊に改編され、一ヶ月後の 6 月には創立 5 周年を迎えた。

ちなみに、大正 13 年 7 月の陸軍書類から、当時の陸軍飛行場の大きさは次となっている。



飛行第五大隊の位置

●飛行学校

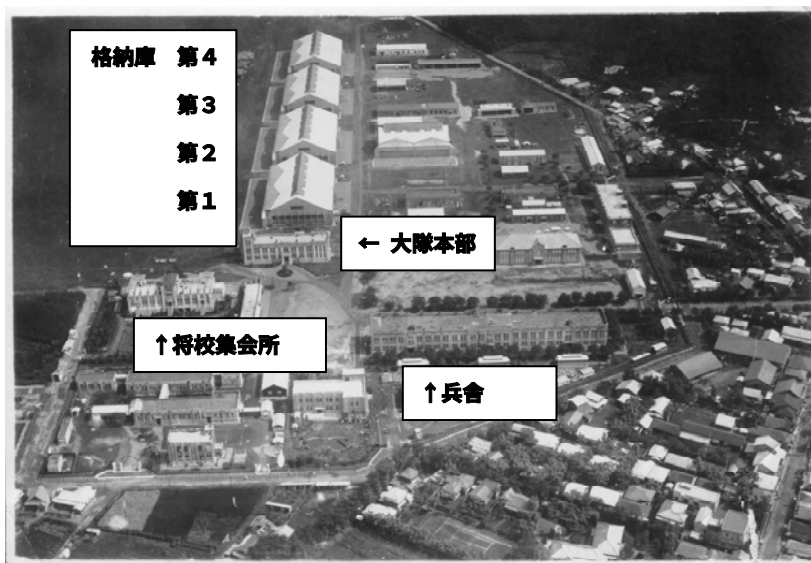
- ・所沢、50 万坪、明治 44 年完成
- ・下志津、20 万坪、大正 10 年完成
- ・明野、30 万坪、大正 8 年

●飛行部隊

- ・岐阜県各務ヶ原（飛行第一、第二大隊）、100 万坪、大正 5 年完成
- ・滋賀県八日市（飛行第三大隊）、40 万坪、大正 9 年完成
- ・福岡県太刀洗（飛行第四大隊）、30 万坪、大正 9 年完成
- ・立川、40 万坪、大正 11 年完成

- ・朝鮮 平壤（飛行第六大隊）、40 万坪、大正 9 年完成

立川は面積からは同率三位であるが、飛びぬけて大きいというわけではないことが分かる。40 万坪とは凡そ 1,320,000 m²、東京ドーム（46,755 m²）の約 28 個分強である。



左は、飛行場を南から北を見た写真。

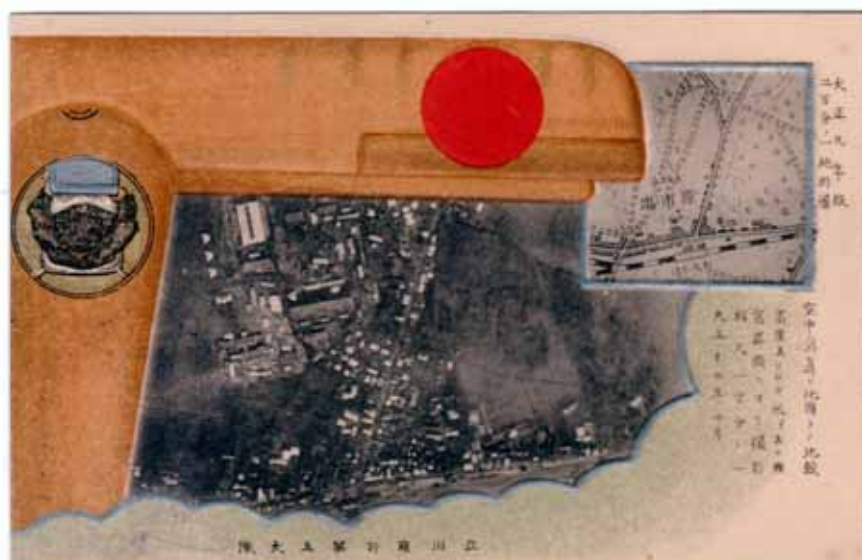
縦に並ぶ格納庫（奥から、第四～第一）、その手前の建物が、大隊本部である。

更にその手前左が将校集会所、そして、右からの大きな建物が兵舎である。

2. 飛行場の変遷



大正12年2月17日の開隊祝賀記念式典時の記念の絵葉書。飛行眼鏡にはエンボス加工が施されており、カラー印刷、デザインといい、非常に手が入っている。（当時の絵葉書より）



飛五の移駐から1年強のちの、大正13年2月の撮影の飛行場風景。

背景の機体は、乙式一型偵察機（サルムソン2A2）である。

■民間施設の建設と移転

州崎（現東京都深川）にあった民間飛行場機能が、大正 12（1923）年 9 月の関東大震災により壊滅し、立川の西地区に移転してきた。また、軍関係もあって人口は増え続け、この年の暮れには立川は町制を敷くに至った。

昭和に入ると中央線の電化等と合わせ利便性がさらに高くなり、立川はいつしか「空の都」「空都」と称されるようになった。昭和 5 年の立川小唄でも歌われている。

東京ばかりか 浅川青梅 五日市から 一と走り

汽車だ電車だ 川崎からも 空の都よ 立川よ

わたしゃ飛行機 風まかせ お前の出ようで 宙返り
オヤクルリトセー ションガイナ

下写真は昭和 4 年当時の日本航空輸送株式会社のもので、朝日や毎日の新聞社も格納庫を立川に建設した。

昭和 6（1931）年 8 月に羽田飛行場が完成するまでの約 8 年間、立川は東京の空の玄関としての顔も有していた。東京の空の



民間施設の位置

玄関ということは、アジアの東端空港であったことで、欧州からの訪問機も立川を訪れている。立川を訪れた機体の中には、太平洋横断で有名な「ミス・ビードル」号もある。

また、逆に、日本の出発地として、訪欧飛行として有名な「初風・東風」、「青年日本」号や「神風」号も、立川との縁が深い。



飛行場南西端の民間格納庫群。日本航空輸送の格納庫は昭和 4 年 6 月竣工なので、それ以降の撮影である（当時の絵葉書より）



陸軍航空本部技術部の位置



石川島飛行機製作所の位置

■陸軍航空の総本山として

昭和 3 年夏、手狭になった所沢から、陸軍航空本部技術部が西地区に移転してきた。以来、立川は陸軍航空技術のメッカとなり、新鋭機や航空技術の開発・試験の中心地となった。同部は、のちに陸軍航空技術研究所になって、より組織発展した。

これに歩調を合わせるように、株式会社石川島飛行機製作所(大正 13 年 11 月設立)が昭和 5 年 3 月、立川飛行場に本拠地を移転した。同社は、昭和 9 年の陸軍練習機の試作において成功を収め、昭和 11 年 7 月には立川飛行機製作所に商号を変更した。

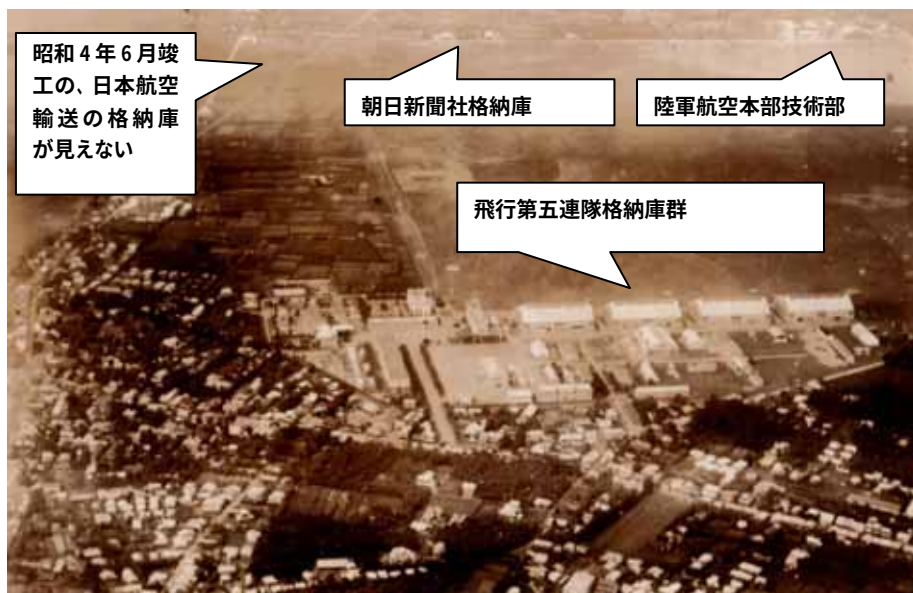
そして、民間機の羽田移転を待っていたかのように昭和 6 年 9 月に満洲事変が始まると、立川は軍事色をより一層強めていく。

その時期の象徴的なイベントが、昭和 8 年 5 月の行幸である。右はその賛画（『航空大写真帖』より）で、昭和天皇と徳川好敏中将（左）。中将は、明治 44 年 12 月の本邦初飛行時の操縦士、その人である。

下は、陸上自衛隊立川駐屯地の史料館近くに残る行幸記念碑。

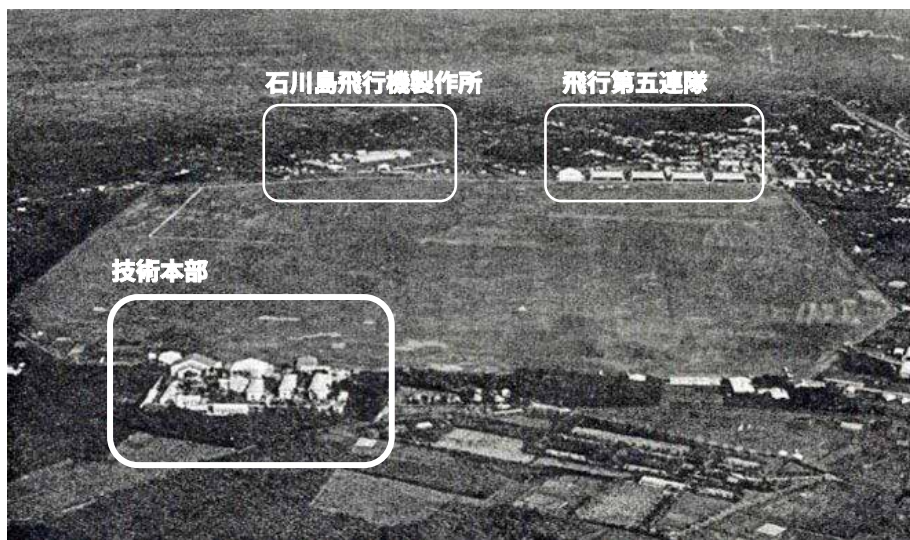


昭和 8 年 5 月の行幸の様子を伝える賛画 (上) と、
今も立川駐屯地に残る記念碑



飛行場東側より西側を見た写真。

対面の西地区に朝日新聞社の格納庫が見えることから、昭和3年3月以降、昭和4年6月までの撮影と考えられる。



飛行場西方から見た技術本部（四角囲み部分）で、昭和5年夏に竣工した技術部の格納庫が見えていることから、それ以降の撮影だろう。

対面が飛五の格納庫群で、第五格納庫（向かって左端）も見えている。



石川島の工場群で、中央やや左に、大組立工場（昭和6年1月築）が見える。

その奥の細長い建物は昭和3年1月築の工場で、両者は今も残っており、多摩モノレールからもよく見える。

（当時の絵葉書より）

昭和 9 年春、補給部の所沢支部が移転して補給部立川支部(開庁式は昭和 9 年 3 月 21 日)となり、民間施設の跡地に置かれた。これにより、立川は陸軍航空の資材物資の中継・補給地としても役割を果たすようになり、昭和 10 年 8 月には立川航空支廠へ改編された。今も青梅線に残る「航空支庁西門踏切」や「航空支庁前踏切」での「航空支庁」は、この立川航空支廠を意味している。

昭和 13 年 8 月、飛行第五連隊は飛行第五戦隊となり、翌 14 年 3 月には千葉県柏に移駐した。その跡地には航空技術学校が入り、立川は単なる軍事基地ではなく、陸軍航空における教育面でも重要な位置を占めることになった。

さらに、名古屋にあった熱田製作所等を立川に移転する形で、昭和 15 年 4 月 1 日、陸軍航空本部お抱えの飛行機工場として航空工廠が設置された。その施設は、技術部や航空支廠の更に西側に設けられ、子安の養豚場も撤去されて、広大な面積を誇った。

これらにより、立川は製造の顔をも併せ持って、太平洋戦争へ突き進んでいく。

■戦後、そして今

終戦により米軍に接収された立川は、飛五の格納庫などがそのまま使用され、平成になっても生き残っていた。米軍基地時代の砂川闘争などを経て、1972(昭和 47)年、返還前ではあったが陸上自衛隊が使用を開始、翌年には駐屯地を開設した。

1977(昭和 52)年 11 月に全面返還された立川飛行場は、東側を消防庁や警視庁などが航空基地として使用し、西側を前述した陸上自衛隊が使用するが、そのほとんどが 1983(昭和 53)年に開園した「昭和記



航空支廠の位置



航空工廠の位置

念公園」として利用されている。

返還後の立川は、戦前から縮小されたとはいえ、滑走路を持つ立派な現役飛行場である。即ち、大正 11 年から現役の続行中であり、日本で現存する飛行場の中では、大正 6 年の岐阜県各務ヶ原、大正 8 年の三重県明野について、立川は最古の部類に属する。所沢や下志津といった旧飛行場は、拡張余地がなかったため戦後を生き残れなかったが、立川には拡張の余地があった。

大正 10 年の飛行場の敷地選定は、的を射たものだったのである。

